

戦時下の学生生活

小宮 一仁

今年（令和2年）は、終戦から75年の節目の年です。私に物心がついた時には昭和39年の東京オリンピックも終わってしまいましたので、私は、戦争は勿論、日本が東洋の奇跡と言われた復興と高度経済成長を急速に成し遂げた時代も経験していません。しかし、戦中、そして焼け野原から日本が立ち直り経済大国・技術立国になって行った時の話は、それらを経験した祖父母や父母からいつも聞いて育ちました。父も母も昭和20年の東京大空襲で家を焼失しました。私はそ

ういう苦勞をせずに育ちましたが、父母らから聞いた戦中戦後の食糧難の時の話が身に沁みついているためか、今でも出された食べ物を残すことができません。

千葉工業大学の前身である興亜工業大学は、昭和 17 年に大学予科 3 年と本科 3 年の 6 年間の修業年限を有する旧制大学として創立され、その年の 6 月に第一期生 160 名を迎え入れました。

当時の教育月刊誌である「帝国教育」(昭和 17 年 12 月号)には、独特の教育方針を持つ大学が創設されたとして興亜工業大学が紹介されています。当時、大学予科或いは旧制高等学校で音楽が正規科目にあったのはこの大学だけでした。このため、興亜工業大学の入学試験では数学や英語といった学科試験の他に、工業大学でありながら絶対音感をはかる試験がありました。これは、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学の名門カレッジの入学試験にあった楽器演奏にも通じるものです。

入学後、ドイツ語の授業ではゲーテのファウストを原語で読みました。国立音楽大学の前身である東京高等音楽学院の

生徒とともに、日比谷公会堂において開催されたヨーゼフ・ローゼンシュトック指揮による日本交響楽団のベートーベン交響曲第九番の演奏会に参加し、ドイツ語で歓喜の歌を合唱しました。また将来社会で指導的な地位に就く者の心得として、太平洋戦争中であるにもかかわらず、全学生が正装し教授陣とともに松本楼で食事をしてテーブルマナーを学び、上野の森ではレオナルド・ダヴィンチ展を鑑賞しました。

勿論、理工学の専門教育や語学教育も徹底して行われました。当時の時間割表を見ると、月曜日から金曜日には毎日6から7コマの、土曜日にも4コマの講義や演習が空き時間なく配置されています。まさに、興亜工業大学の建学の精神にある、世界文化に技術で貢献する真のエリートたる人材、高度な専門能力と豊かな教養を身に付けた人材を養成しようとする教育が実践されました。

しかし、戦争は大学にも様々な影響を与えました。創立時から生活用品は逼迫し、米の配給量も少なく外食も困難でした。授業の他に軍事教練や技術将校になるための士官学校での合宿訓練、そして勤労働員等がありました。修業年限も短

縮されました。玉川の地を離れた後は校舎の移転を余儀なくされ、戦局は益々不利になっていったため設備や授業の充実には望むべくもありませんでした。また理工系と教員養成系の学生は出征を免除されたと言われていますが、入営延期年齢を超えた学生はこの限りではなく、興亜工業大学からも入隊した学生がいました。

ある興亜工業大学の最初の卒業生が、90歳になった時に学生時代を回想しています。「私の大学生時代は、予科は第二次大戦の戦局の向きが変わり始めたころから始まり、学部は戦局が破局を迎え遂に敗戦で社会の混乱の極に達した困窮のさなかに終わった。大学創立時の修業6年の予定が、困窮、耐乏の5年半で終わったのである。一番行いたかった勉学は思うようにできなかったが、興亜工業大学に入学して、当時の世間一般の大学の学生とは一風違った学生生活を送れたことが卒業後の強列な思い出になっている。Karl Busseの「山のあなた」の詩をドイツ語で暗記し、70年を経ても暗唱できて懐かしさひとしおである。」

なんと素晴らしい大学生生活を送られたのでしょうか。当時の

学生達は、時代の流れを冷静かつ真摯に受け止め、太平洋戦争中という苦難と不自由の中にあっても、勉学に励み、できる限り青春を謳歌したのだと思います。

令和2年7月26日